

(5) L4地区

L4地区は、L3地区北半部の西に設定した地区である。この地区は調査前の現況が他の地区と異なり、杉や檜などの植樹・育成が行われていた。そのためか、この地区での遺構検出時には攪乱坑が多数検出され、遺構も損壊が著しいところがあった。

遺構は全て地山である黄灰色系粘質土の上で検出したが、時期的には、下層遺構として古墳時代前期の土坑・竪穴式住居跡各1基、古墳時代中期後半の方墳・円墳4基などを、上層遺構として掘立柱建物跡3基・溝、その他、時期不明の柱穴などに分離することができる。

以下、古墳時代を中心とする下層遺構と、奈良時代を中心とする上層遺構に分けて概観することとする。

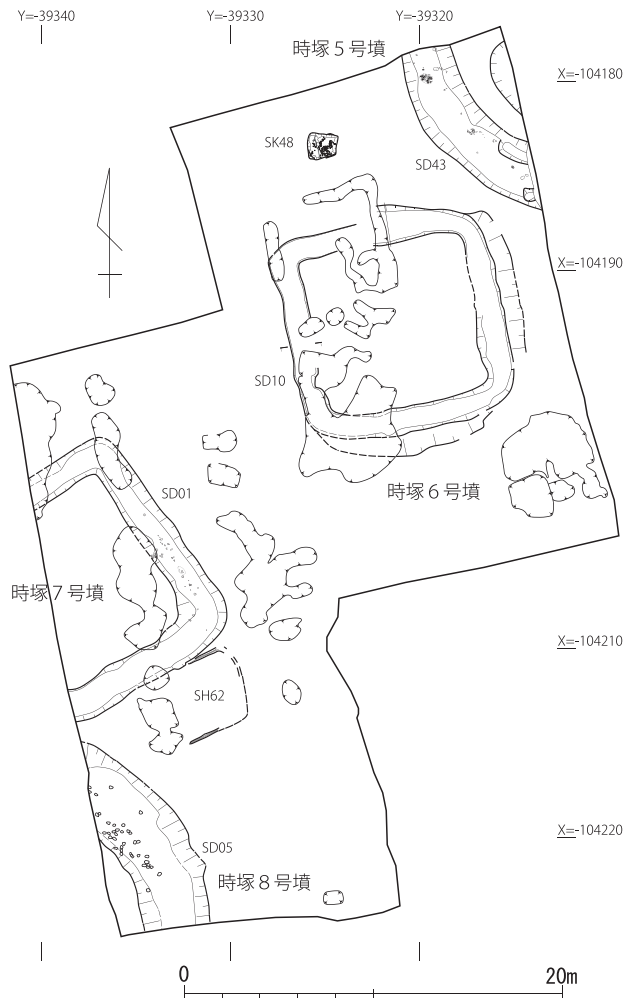
1) 古墳時代の遺構・遺物

A. 検出遺構

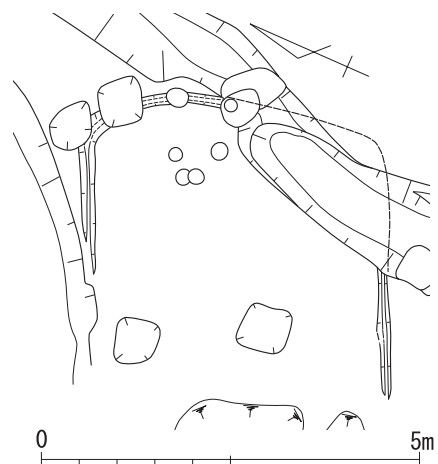
古墳時代に属する遺構として、竪穴式住居跡1基・土坑1基・古墳4基を検出した。

竪穴式住居跡 S H62 (第148図) 調査区の南で検出された竪穴式住居跡である。主軸は北より西に振る。平面は方形プランを呈し、規模は東西4m以上、南北4.1mを測る。遺構の遺存状況はきわめて悪く、周壁溝が深さ2～5cm程度遺存しているに過ぎず、西側は削平のため、全く遺存していない。また、支柱穴などの住居内施設を特定することもできなかった。遺物はこの住居床面相当部を精査中に土師器小片が数点出土している。図示することもできず、明確な時期を示すことはできないが、古墳時代前期から中期に属するものとする。

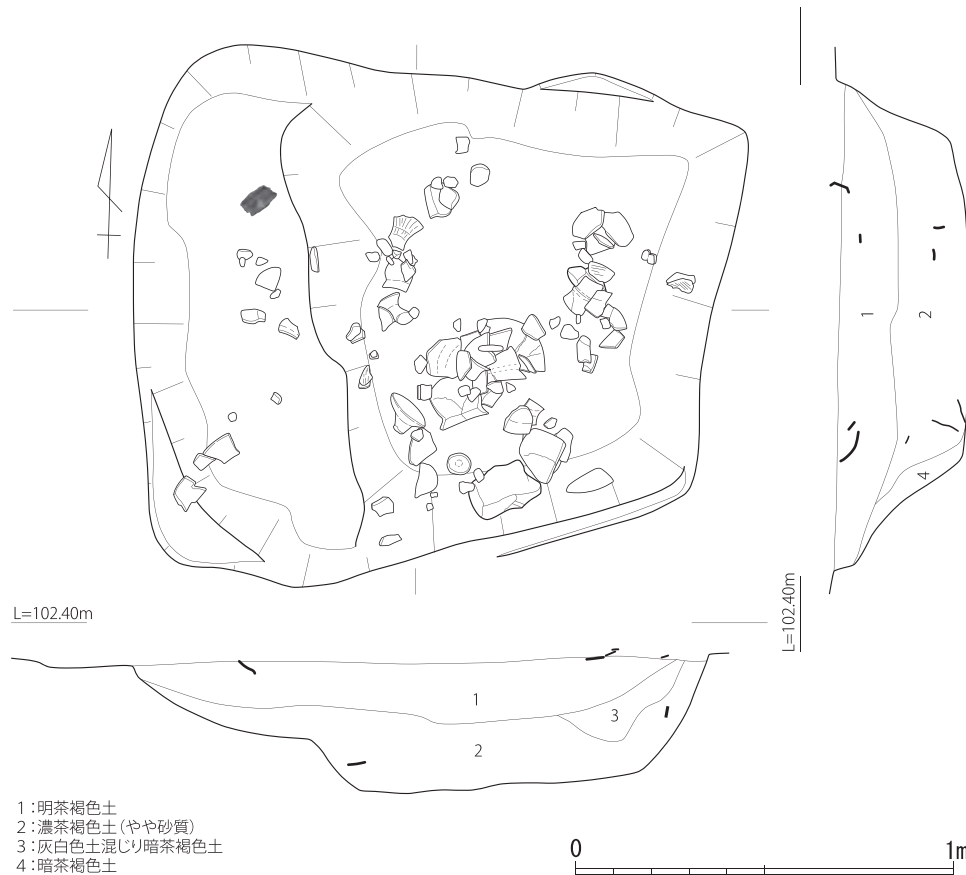
S K48 (第149図) 調査区の北側で検出された土坑である。平面は西側がやや幅広い長方形プランを呈し、長軸1.5m、西側幅1.4m、東側幅1.0mを測る。西側のほう



第147図 L4地区検出遺構配置図(古墳時代、1/400)



第148図 竪穴式住居跡 S H62平面図 (1/100)



第149図 SK48実測図(1/20)

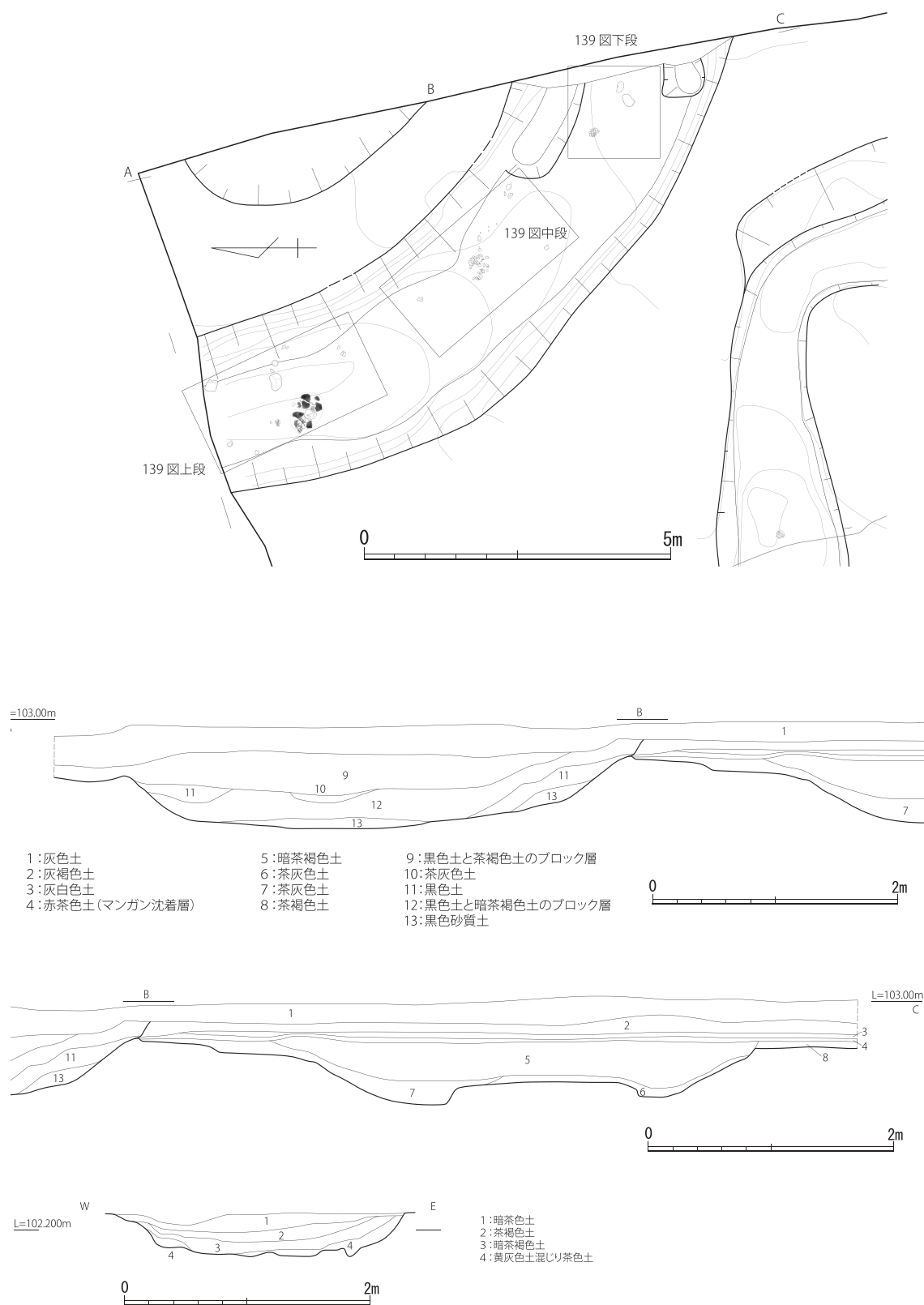
に段をもち、東側はさらに一段深く掘削されている。西側の段までの深さは0.2m、東側で土坑底面までの深さ0.35mを測る。

土坑内からは多数の土師器(第156図1～10)が検出された。甕・高杯・器台・蓋・ミニチュア土器など、多様な器種がみられ、大型の破片が中心である。出土層位は第149図第2層を中心にするが、第1層中からも小破片が検出されている。また、これらの土器群とともに、角礫と炭が検出されている。

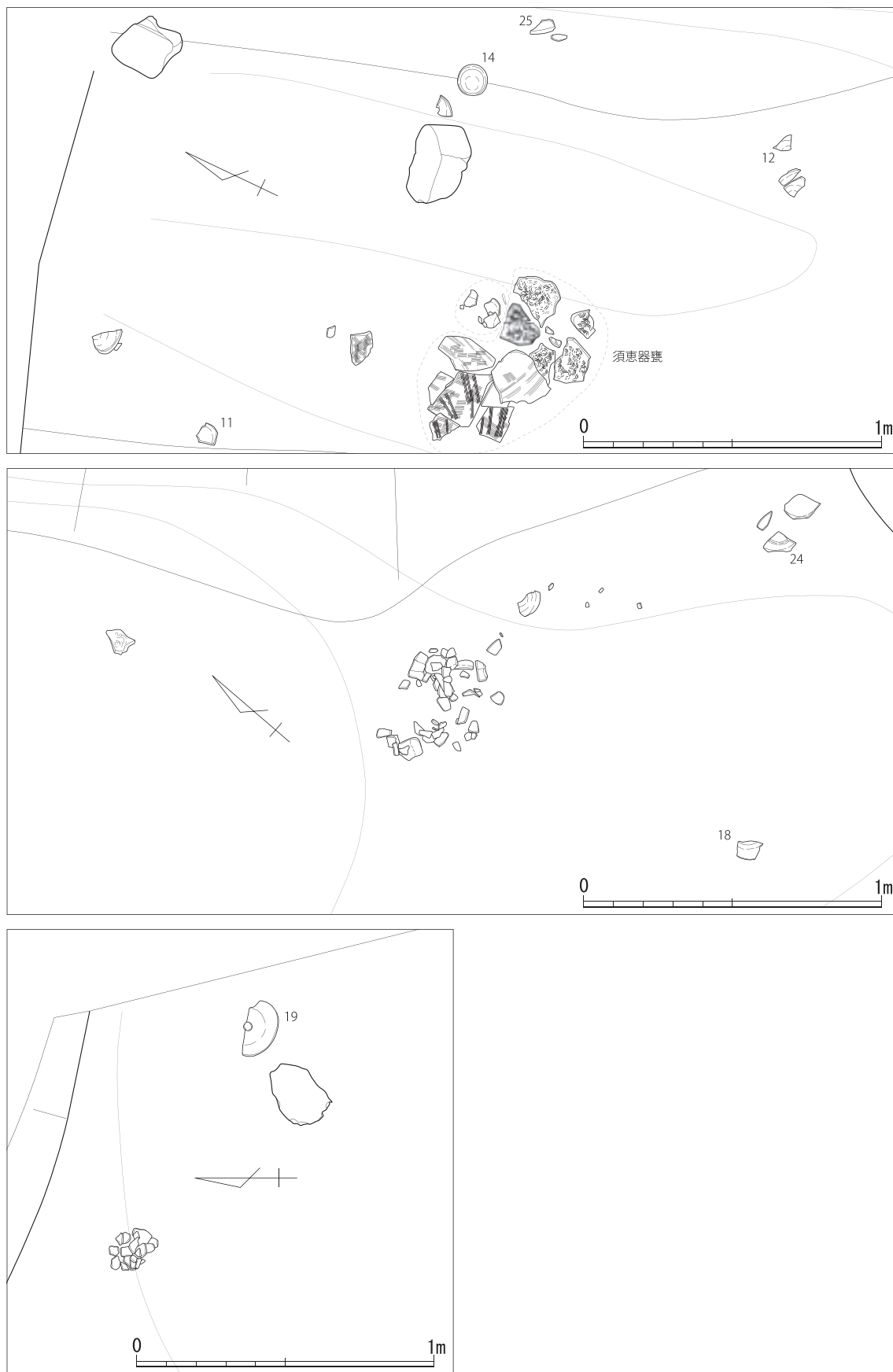
遺構の性格については明確ではないが、現況では湧水点に達しているため、集落に伴う素掘りの井戸の可能性を考えておきたい。埋土の状況からは人為的な埋め戻しがなされたとは考えられず、遺構廃絶時に投棄された遺物が自然に埋没したものと判断する。また、ミニチュア土器が出土していることは祭祀が行われたことを示唆している。

時塚5号墳(第150図) 調査区の北東部で検出された平面が弧を描くSD43を古墳の周溝と判断した。SD43の平面形が弧状を呈することから、円墳と判断される。古墳の南西部を検出したと考えられる。

周溝は幅3.0m、深さ0.4～0.5mを測るが、周溝床面は南から北へ傾斜している。また、周溝の北東の土坑を当初、墓壇の可能性のあるものと考えて調査を実施したが、壁面の土層観察の結果、この土坑は周溝埋土のさらに上層の層位から掘り込まれていることが明らかとなり(第150図)、



第150図 時塚5号墳実測図(平面: 1/100、断面1/50)



第151図 時塚5号墳遺物出土状況図(1/20)

埋葬施設ではないものと判断した。

周溝内から須恵器や土師器が検出されている(第151図)。いずれも周溝底面に接するか、やや遊離した状態で検出されているが、中には、第157図19～26の奈良時代の須恵器も含まれているため、この古墳は奈良時代には完全には埋没していなかったものとする。時塚3号墳と同様、奈良時代以降に周溝が埋没し新たな土地利用がなされていったものと判断される。また、遺物と同時に人頭大の角礫が検出されているが、墳丘基底に据え付け痕などを検出することはできず、これらがこの古墳の外部表飾として使用されたものである確証を得ることはできなかった。

時塚6号墳(第153図) 時塚5号墳の南西で検出された方形に巡るS D10を古墳の周溝と判断した。墳形は方墳である。周溝は西側が攪乱と削平により遺存状況が悪いが、完周する。今回の調査の中で、唯一全体を調査できた古墳である。

周溝の規模は北側で幅2.1m・深さ0.3m、東側で幅1.7m・深さ0.3m、南側で幅1.4m・深さ0.2m、西側で幅1.2m・深さ0.1mをそれぞれ測る。また、東および南側の周溝では、周溝外が一段緩やかな傾斜を呈した後、深く掘削されている状況が観察された。また、周溝外よりも墳丘側の方が傾斜角が大きい点も特徴的である。墳丘の規模は基底部で東西9m、南北9mを測る。墳丘の主軸方向はN11°Wを測り、北からわずかに西に振る。埴輪、葺石などの外部表飾は確認されておらず、時塚5号墳のような角礫も検出されていない。

墳丘は削平のため、基底の地山削り出し部分のみが遺存しており、埋葬施設を検出することはできなかった。

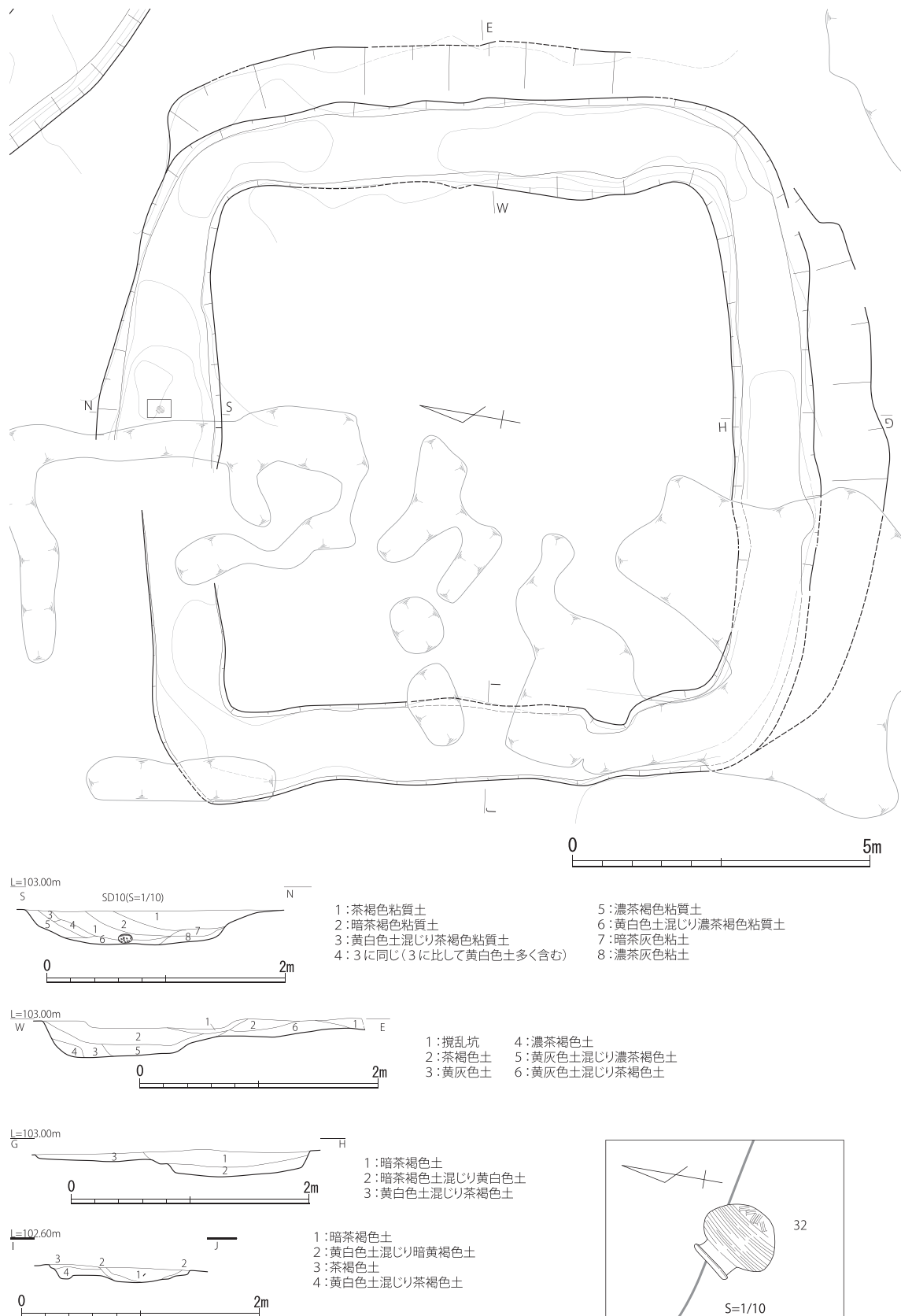
周溝内から細片化した須恵器が数点出土しているほか、北周溝中央部で、須恵器壺1個体(第157図32)が横位で検出された。ほぼ周溝床面に接していることから、周溝埋没前の築造時に近い時期を示すものとみられる。ただし、この須恵器壺が、墳丘外からの転落あるいは遺棄なのか、墳丘側からの転落なのか、この場に供献されたものなのか確証を得ることはできなかった。

時塚7号墳(第153図) 調査区西側で検出されたS D01を古墳の周溝と判断した。墳形は方墳である。墳丘西側が調査区外となっており、全容は不明である。また、北側と北東隅部分は大きく攪乱を受けている。周溝は検出した範囲では完周しており、陸橋部などはみられない。

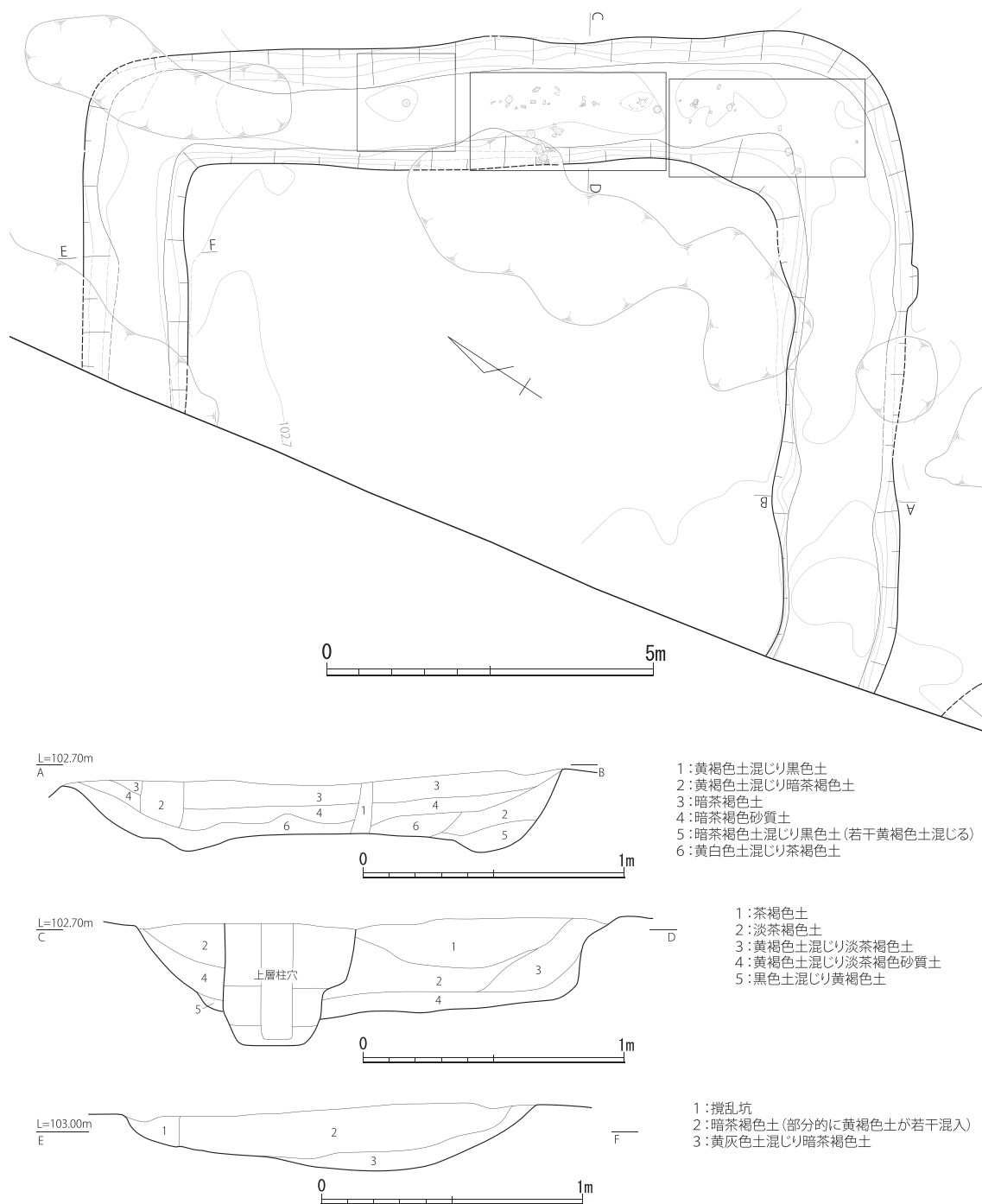
周溝の規模は北側で幅3.2m・深さ0.5m、東側で幅3.7m・深さ0.7m、南側で幅3.8m・深さ0.6mをそれぞれ測る。周溝断面では、墳丘側の方が、周溝外側より傾斜角が大きい点の特徴的である。また、周溝南側では基底部および、周溝外側底面に浅い掘り込みを行っている部分も断面から確認された。墳丘の規模は基底部で東西8m以上、南北9.8mを測る。墳丘の主軸方向はN31°Wを測り、北から西に振る。埴輪、葺石などの外部表飾は確認されておらず、時塚5号墳のような角礫も検出されていない。

墳丘は削平のため、基底の地山削り出し部分のみが遺存しており、盛土や埋葬施設を検出することはできなかった。

東側周溝底面上で、多数の須恵器、土師器を検出した(第154図)。器種には、杯身・杯蓋・甗・壺などが認められる。いずれも完形個体もしくは、大型の破片の状態で検出された。なかでも壺



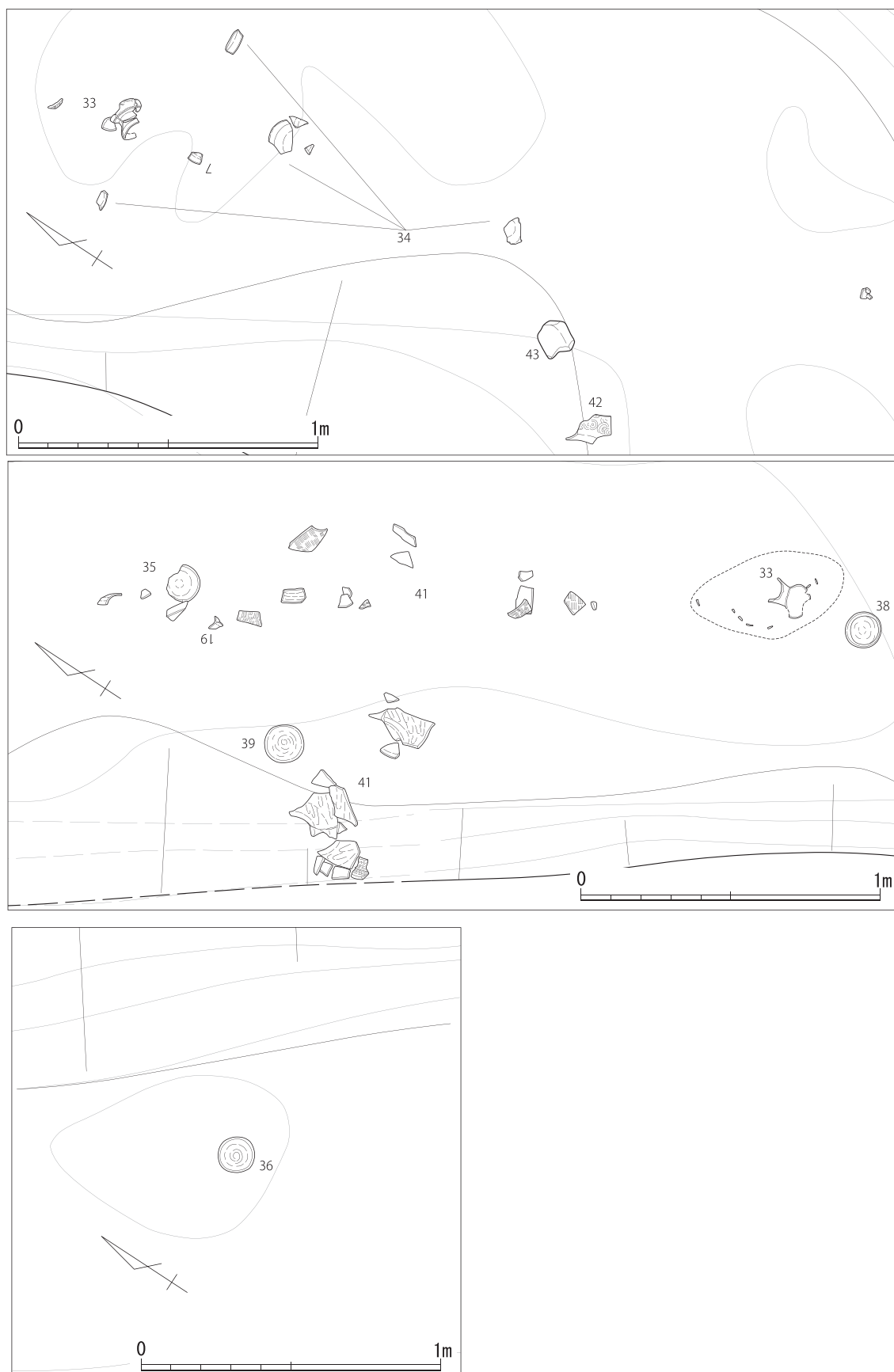
第152図 時塚6号墳実測図(平面:1/100、断面1/50、遺物出土状況図:1/10)



第153図 時塚7号墳実測図(平面: 1/100、断面: 1/50)

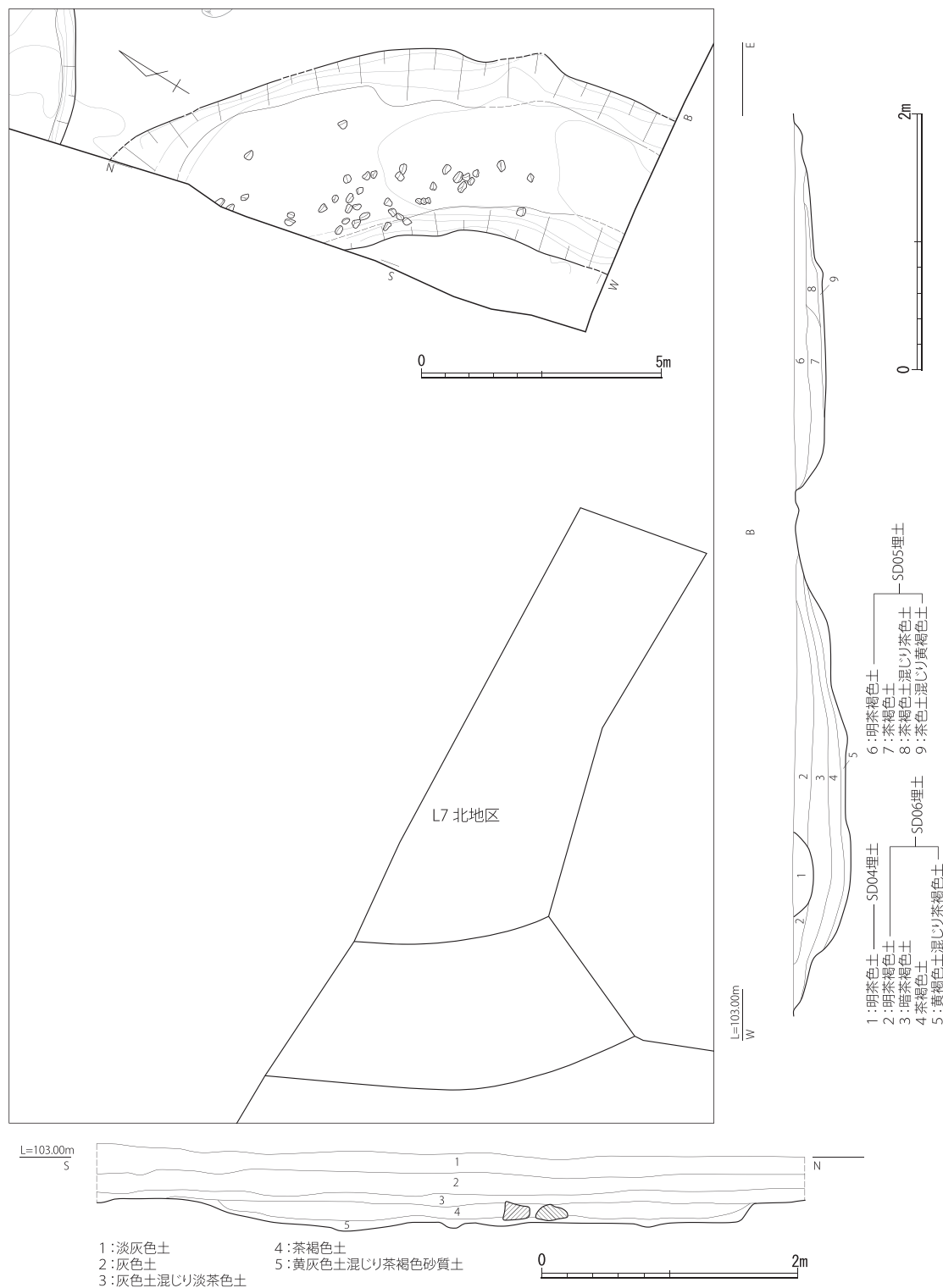
(41)は墳丘斜面直上で検出されており、墳丘側から転落した状態とみられる。また、その他の個体も周溝底面直上、もしくはやや遊離した状態で検出されているため、この壺と同時期に溝内に墳丘側から転落したものとみられる。また、周溝底面や、墳丘肩部直上で検出されていることは、周溝埋没以前に土器群が転落した状況を示しているものと考えられ、古墳の削平時や、墳丘の流失に伴って混入した遺物ではないと考える。したがって、これらの土器群は、埋葬施設内のものではなく、墳丘上で使用された土器群として評価できる。

時塚8号墳(第155図) 調査地の南西部で検出されたS D06を古墳の周溝と判断した。S D06



第154図 時塚7号墳遺物出土状況図(1/20)

は弧状を呈しているため、墳形は円墳と判断された。また、L7地区の北側に設けた排土置き場で床土直下から検出された溝が、平面的にこの溝と連続する可能性が高いことが明らかとなり、基底部で直径約23mを測る円墳であると考えられる。周溝は部分的に検出したに過ぎないが、幅6m、深さ0.5mを測る。また、周溝底面は北から南へ傾斜している。



第155図 時塚8号墳実測図(平面：1/125、断面：1/50)

墳丘は削平のため、基底の地山削り出し部分のみが遺存しており、埋葬施設を検出することはできなかった。

遺物は周溝内から細片化した須恵器・土師器が出土しているが、いずれも周溝底より遊離している。また、周溝内からは多数の拳大の角礫が検出された。ほぼ周溝床面に接しているものも存在したが、遊離しているものも多く認められる。角礫の平面的な検出状況からは墳丘側からの転落の可能性が高いものと考えられるが、古墳の基底にこれらの礫を据え付けた痕跡などは認められず、古墳の表飾施設としての確証を得ることはできなかった。

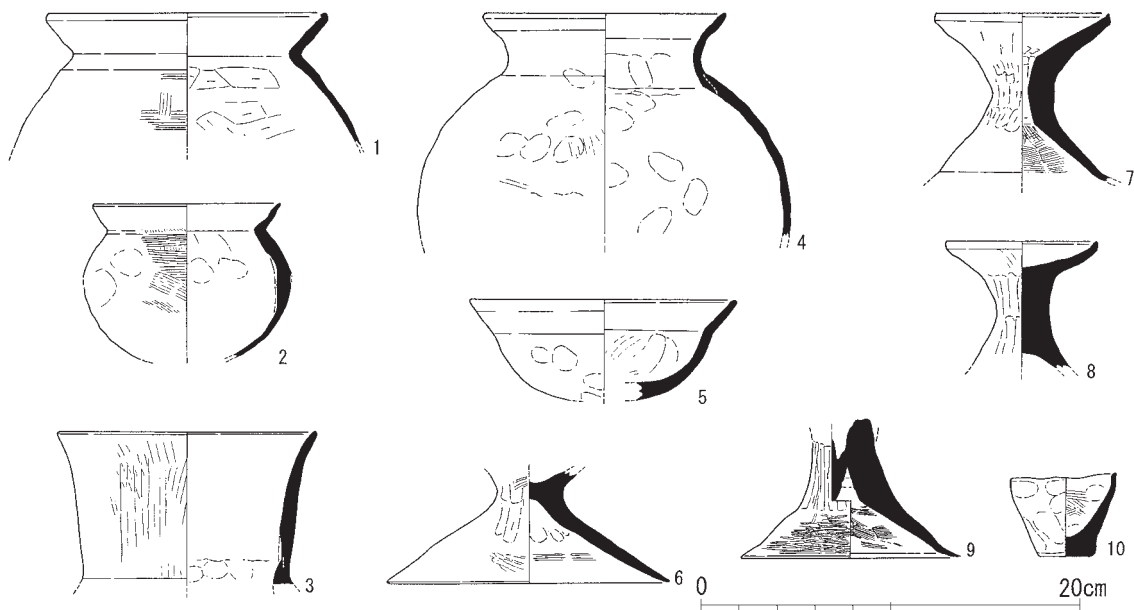
(岡崎研一・石崎善久)

B. 出土遺物(第156～158図)

L 4 地区出土遺物として、S K 48出土の土師器および古墳出土遺物を図示した。

S K 48 (第156図) 1・2は土師器甕である。1は復原口径14.6cmを測る。口縁端部は内側に折り曲げて肥厚させる。体部内面のケズリは口縁部との屈曲部までは及ばず、屈曲部はナデにより仕上げられている。外面は横方向を主体とするハケで調整する。煤の付着が認められる。2は復原口径9.8cmを測る小型の甕と考えるが、粗製の小型丸底壺の可能性もある。火を受けているためか、器壁の剝離が著しい。短く内湾気味に立ち上がる口縁をもつ。3は直口壺の口縁である。外面は荒いハケがみられる。4は広口壺である。頸部は短く外反し口縁部はやや内湾する。体部は球形に近い。5は粗製の鉢である。外面に煤が付着している。6は蓋である。薄手のつくりである。7・8は小型器台である。7は中空の、8は中実の脚柱部をもつ。9は高杯脚部である。中実で短い形態をとる。底部側と、杯部側の両方に貫通しない工具の刺突痕がみられる。10はミニチュア土器である。鉢の模倣品と考える。底部は平底を呈する。これらの土師器は当地域における布留甕導入段階の土器組成を示しているものと評価したい。

時塚6号墳(第157図11～29) S D 43出土遺物を図示した。古墳時代から奈良時代の遺物が混

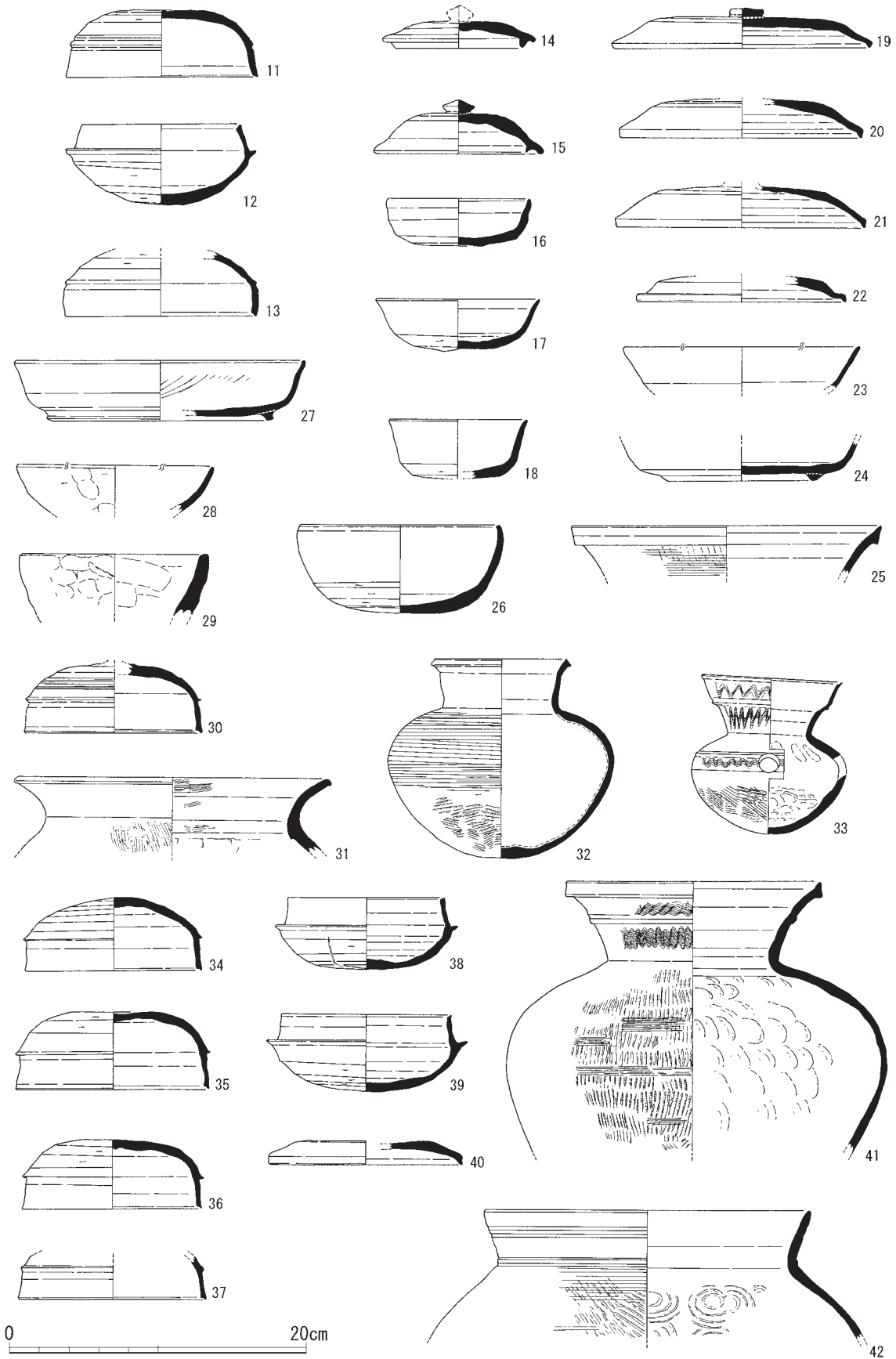


第156図 L 4 地区出土遺物実測図(1)(S K 48)

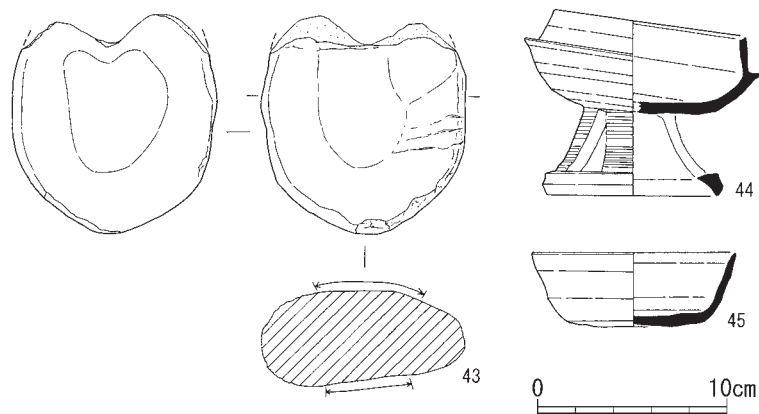
在する。このうち、この古墳の築造時期に近いものとして、須恵器蓋杯のセットである11・12を当てる。杯蓋11は天井部の高い形態を示すが、天井部はやや平坦に整形され、稜や端部にもやや新しい要素をみることができる。杯身12は口縁がやや内傾気味になり、口縁端面は平坦に整形される。これらの点から、この須恵器は在地産であり、陶邑編年MT15型式に併行する段階のものと考えておきたい。13は周溝埋土中から出土した須恵器杯蓋である。稜が沈線で表現される。14は須恵器蓋である。壺に伴うものと考えられる。15～18は飛鳥時代の須恵器蓋杯である。19は杯G蓋であり、高い天井部に突出するかえりをもつ。19～24は奈良時代後半に属する須恵器蓋杯類である。25は須恵器甕の口縁部である。26は須恵器碗である内湾する体部と平底気味の底部からなる。28は土師器杯である。29は製塩土器であり、奈良時代のものとする。これらの遺物から、この周溝は奈良時代に埋没したものと考えられる。また、飛鳥時代の土器が出土していることは、飛鳥時代にも、この地区で何らかの土地利用がなされていたことを示唆するものである。

時塚7号墳（第157図30～32） 周溝内出土遺物3点を図示した。30は周溝埋土出土の須恵器高杯蓋である。復原口径11.8cm、残存高4.65cmを測る。天井部にはカキメが施される。稜は鋭利に削り出され、口縁端面は段を形成する。31は周溝埋土出土の土師器甕である。外反する口縁をもち、口縁端部は平坦面をなす。32は須恵器直口壺である。短く直立する頸部に短く外反する口縁が付く。口縁端面は平坦に仕上げられる。体部は上半がカキメ、下半にタタキが観察される。内面は回転ナデにより調整される。これらの遺物のうち、この古墳に確実に伴うのは32であるが、やや特異な器形のため、この個体のみから帰属年代を示すことはできない。一方、埋土出土ながら30は陶邑編年TK23・47型式に併行する段階のものと考えられる。32の調整技法などと矛盾しないため、この古墳の築造時期をTK23・47型式併行段階と考える。

時塚8号墳（第157図33～42、第158図43） 周溝内出土遺物11点を図示した。出土状況から古墳墳丘側から転落した遺物群であり、この古墳の築造時期を直接示す資料として評価できる。33は須恵器甕である。体部は扁平であり、体部最大径は体部やや上方にもつ。肩部に一条の沈線を施し、その下方に波状文を施文する。頸部は短く、口縁との境に鋭い稜をもつ。口縁端部は凹面を形成し、口縁外側面には波状文を施文する。体部下半外面には細かなタタキが残される。34～36は須恵器蓋である。34は口径11.8cm、器高5.0cmを測る。天井部は高く丸みを帯びている。稜は鋭く突出し、口縁端面は段を形成する。35は口径12.9cm、器高5.2cmを測る。天井部は平坦であるが、天井部の高い形態をとる。稜は鋭く突出し、口縁端部は段をなす。36は口径12.0cm、器高4.7cmを測る。天井部は高く、稜は鋭く突出し、口縁端部は段をなす。37は周溝埋土出土の小片であるが、形態的にこれらの須恵器杯蓋と近似する。38・39は須恵器杯身である。38は口径10.4cm、器高4.85cmを測る。口縁は高く直立し、口縁端部はやや肥厚し、端面は平坦に整形される。わずかに平底気味であり、広範にヘラケズリが施される。39もほぼ同様の形態をとるが、口縁端面は段を形成する。口径11.25cm、器高5.2cmを測る。内面に赤色顔料が付着する。41は須恵器壺である。頸部中央に一条の突帯を削り出し、その上下に波状文を施文する。口縁端部は外面に面をなし、端部は上方につまみ上げるように納める。外面は平行タタキを施した後、横方



第157図 L 4 地区出土遺物実測図(2)



第158図 L4地区出土遺物実測図(3)

向のカキメにより調整する。内面は青海波紋を擦り消している。外面には自然釉が付着する。器壁の薄い個体である。42は直立する口縁をもつ須恵器甕である。短く立ち上がる口縁外側面には2条の沈線を施す。40は須恵器杯蓋である。埋土中出土の遺物であり、周溝の

埋没時期を示す資料である。平らな天井部と下方に短く屈曲する口縁部をもつ。奈良時代後半の遺物と考える。43は使用痕の残る石製品である。上端を欠損するが、扁平な円形の砂岩系の石材を用いている。明瞭な擦痕は観察できないが、両面とも中央が皿状にわずかに窪んだ形態を呈し、その部分が磨かれたように平滑になっている。磨石の用途が考えられる。以上、時塚8号墳出土遺物は今回調査した古墳のなかでも古相を示す須恵器群で構成されている。陶邑編年TK23型式に併行する段階のものとして位置づけておきたい。

時塚9号墳(第158図44・45) SD06出土遺物2点を図示した。このうち、直接古墳に関連する遺物は44である。44は短脚有蓋高杯である。焼け歪みが著しいが、復原口径10.1cm、器高約9.2cm、杯部の高さ4.8cmを測る。脚はほぼ三角形に近いスカシを三方に施す。また、脚柱外側面には2段にわたってカキメを施している。杯部の立ち上がりはやや内傾し、口縁端部はわずかに段を形成する。杯部がやや扁平な形態をとり、口径も大型化していることなどから、在地産の須恵器であり、陶邑MT15型式併行期のものと考えておきたい。45は埋土中出土の須恵器杯Gの身である。当古墳の埋没年代を示す資料と考える。

(岡崎研一・石崎善久)

2) 奈良時代以降の遺構・遺物

A. 検出遺構

L4地区では、奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡3棟・溝・土坑などを検出した。また、掘立柱建物跡に復原できなかったピットも多数検出している。以下、主要な遺構について概観する。

掘立柱建物跡 S B01 (第160図) 調査区北東部で検出した南北2間(3.2m)、東西2間(3m)の総柱の掘立柱建物跡である。

主軸方位はN11°Wを測り、若干西に主軸を振る。

建物を構成する柱穴の平面形は方形、もしくは不整形方形を呈し、規模は一辺0.4～0.7mを測る。断面形は素掘りのものと、柱穴を据え付けるため底面を一段深く掘り込むものの両者が認められる。深さは0.2～0.3mを測る。柱痕跡の検出されたものからこの建物には径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。

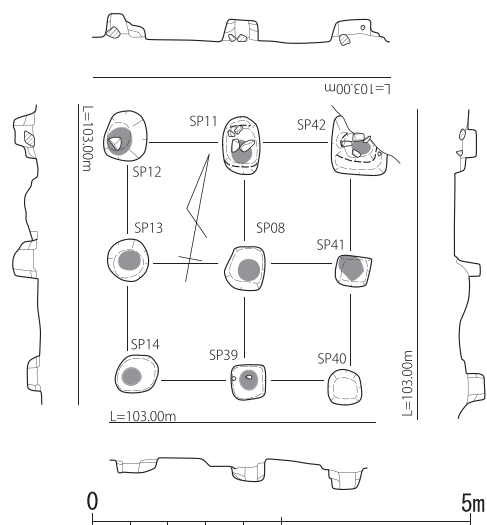
この建物では、柱穴内に拳大の石材が検出された柱穴が多くみられた。柱痕跡に沿うように配されていることから、柱固定用に使用されていたものと考えられる。

掘立柱建物跡 S B02 (第161図) 調査区南西部で検出した南北2間(3.8m)、東西2間(3.3m)を測る総柱の掘立柱建物跡である。西側は後世の攪乱により、遺存状況は悪い。

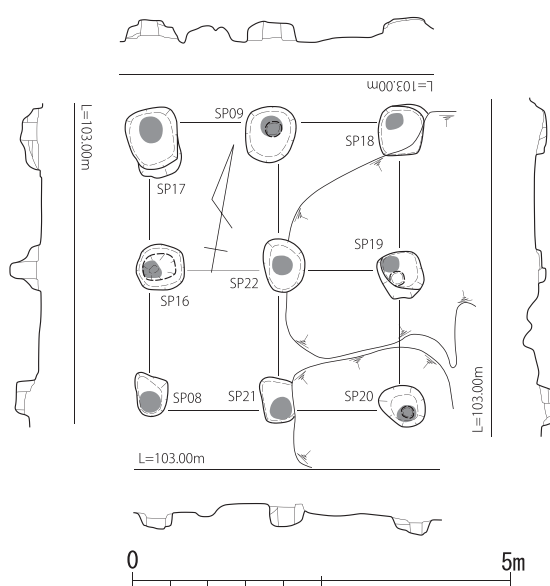
主軸方位はN11°Wを測り、掘立柱建物跡 S B01 とほぼ同軸で、若干西に主軸を振る。建物を構成する柱穴の平面形は方形、もしくは不整形方形を呈し、規模は一辺0.4～0.8mを測る。断面形は素掘り



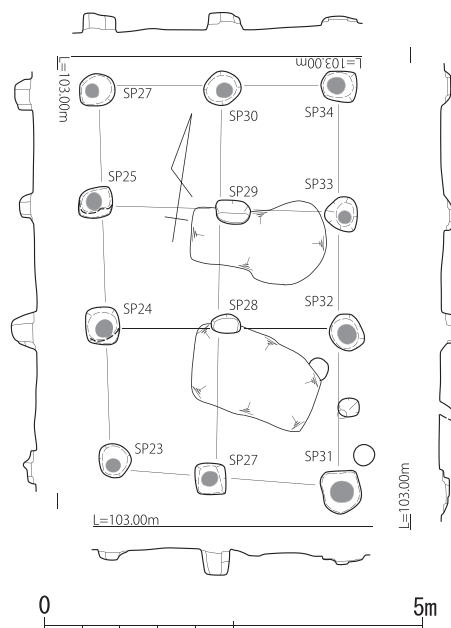
第159図 L4地区検出遺構配置図(奈良時代、1/400)



第160図 掘立柱建物跡 S B01実測図
(1/100)



第161図 掘立柱建物跡 S B02実測図
(1/100)



第162図 掘立柱建物跡 S B03実測図
(1/100)

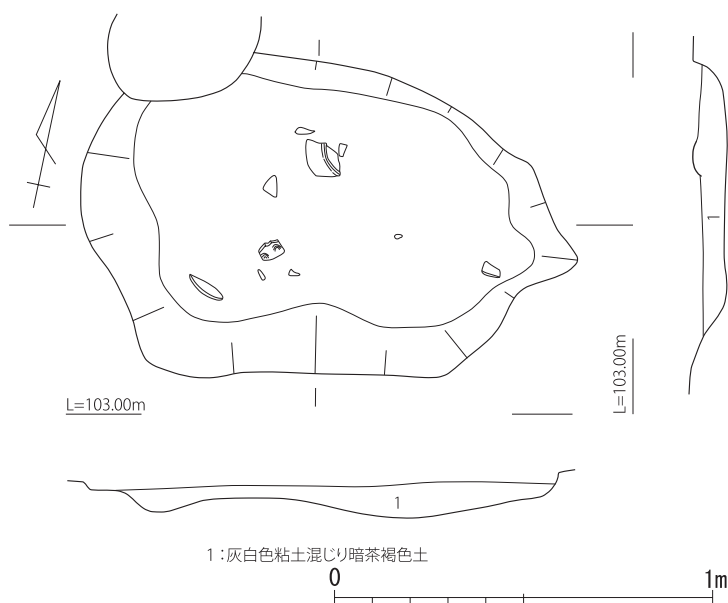
のものと、柱穴を据え付けるため底面を一段深く掘り込むものの両者が認められる。深さは0.1~0.4mを測る。柱痕跡の検出されたものからこの建物には径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。遺物は柱穴から須恵器・瓦が出土している。

掘立柱建物跡 S B03 (第162図) 調査区中央で検出した東西2間(3m)、南北3間(5.1m)を測る総柱の掘立柱建物跡であ

る。南梁行の柱通りがやや悪く、東桁行で5.3m、西桁行で5.1mと差が生じており、ややいびつな平面形を呈する。また中央の2か所の柱穴は後世の攪乱により大きく削平を受けている。主軸方位はN 9° Wを測り、やや西に振る。

建物を構成する柱穴の平面は、方形もしくは不整形方形を呈し、規模は一辺0.3~0.6mを測る。断面形は素掘りのものが大部分であるが、柱を据え付けるために床面を一段深く掘り込んだものも存在する。深さは0.1~0.3mを測る。柱痕跡の検出されたものから、この建物には径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。遺物は柱穴から須恵器が出土している。

S K 49 (第164図) 掘立柱建物跡 S B01の北西で検出された長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.1m



第163図 S K 49実測図(1/20)

を測る不整形な土坑である。埋土は単層であり、埋土中から須恵器片が出土している。廃棄土坑の可能性が考えられる。

S D04 調査区を南西から北東にむけて斜行する幅0.6m、深さ0.2mの素掘り溝である。調査区の中央付近では削平のため検出することはできなかった。また、他の遺構との切り合い関係から、この地区では最も新しい段階の遺構であると考えられる。

S D05 調査区の南東側で検出された幅2.9m、深さ0.3mの溝である。複数回の再掘削がなされたものとみられ、溝底面は凹凸が著しい。

S D50 S D05の東で検出された幅2m、深さ0.1～0.2mの溝である。平面的にはやや弧を描いているが、古墳に関連する遺物の出土をみることがなく、古墳とは判断できなかった。

(岡崎研一・石崎善久)

B. 出土遺物(第164図) L4地区出土遺物として、掘立柱建物跡・土坑・溝からの出土遺物を図示した。

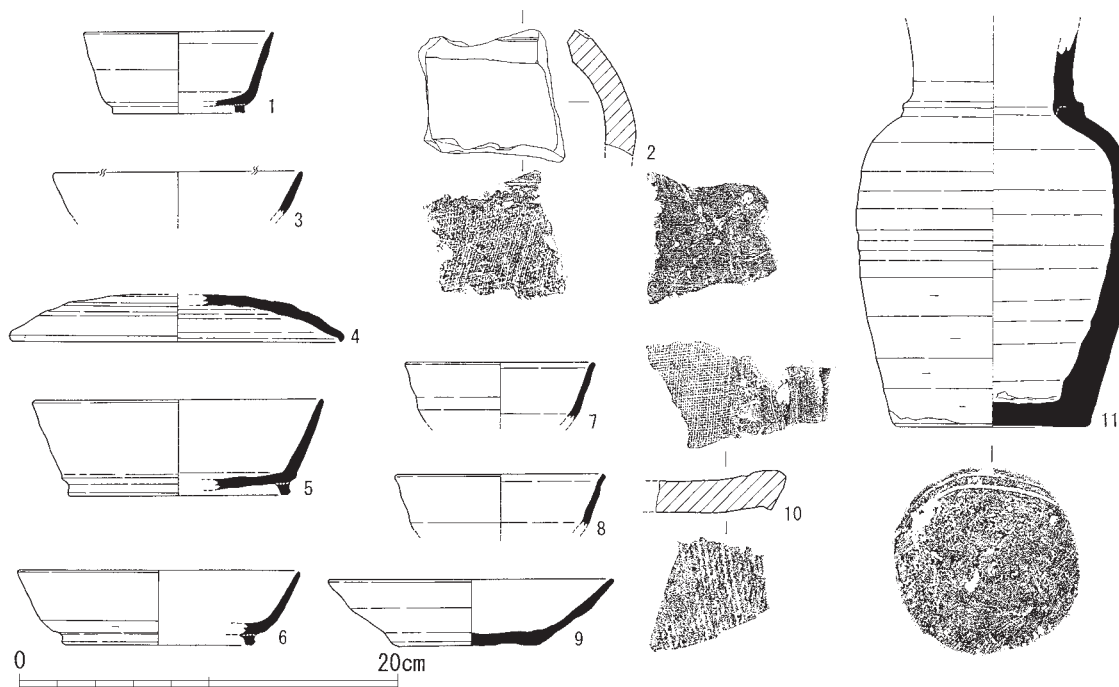
S B02(1・2) 1はS P16出土の須恵器杯Bである小法量で器高の高い形態をとる。2はS P21出土の丸瓦片である。内面に布目が残る。

S B03(3) 3はS P27出土の須恵器杯小片である。

S K49(4・5) 4は須恵器杯蓋である。笠型で器高のやや高い形態をとる。口縁部はわずかに下方に屈曲する。5は須恵器杯身である。体部は直線的にのび、高台は底部外縁につく。

その他の遺構の出土遺物(6～11) 6はS D05出土の須恵器杯である。7はS P57、8はS P37出土の須恵器杯、9はS P56出土の土師器皿である。10はS D04出土の平瓦であり、凹面は布目、凸面には縄目タタキが残る。11はS D06上面で出土した陶器の壺である。軟質で底面に糸切りがみられる。

(岡崎研一・石崎善久)



第164図 L4地区出土遺物実測図(4)

京都府遺跡調査報告集 第135冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141